

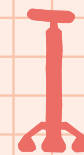


博愛記念病院
月刊広報誌



身体拘束は ゼロにできる

医療現場では、徘徊や転落、
チューブ類の抜去などの
危険を防止するために
身体拘束が行われてしまうことも。
当院では、目的ある離床や
患者さんの尊厳を大切にした
ケアなどに取り組むことで
身体拘束ゼロを実現しています。

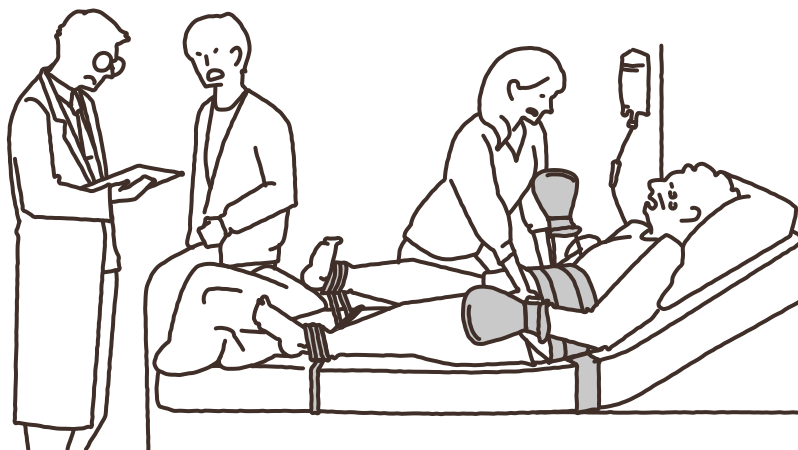
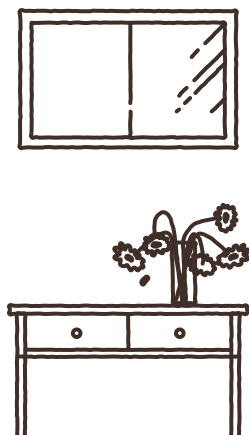




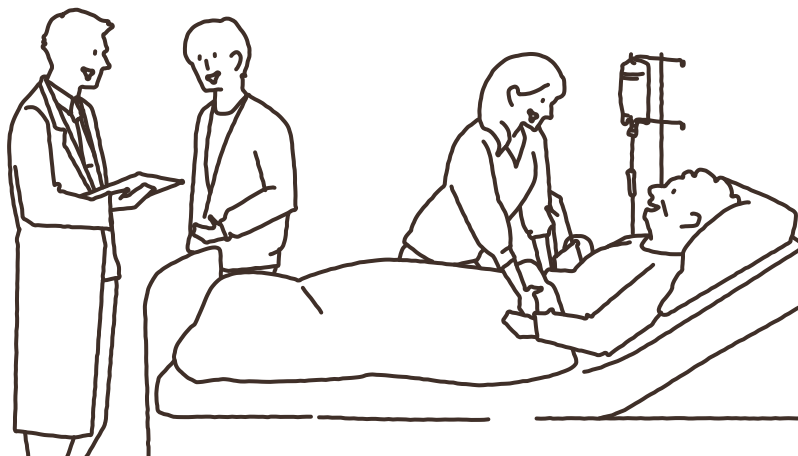
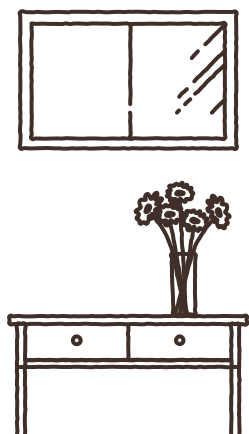
身体拘束を廃止します



BAD



GOOD



身

身体拘束により自由に動けなくなった患者さんは、関節拘縮や褥瘡^{じよくそう}、筋力や心肺機能の低下といった身体的な悪影響だけでなく、精神にも極度のストレスを被ります。怒りや不安、スタッフへの不信感といった段階を経て、最終的にはすべてをあきらめ、生きる意欲を失ってしまいます。しかし、いまだに多くの医療現場では、点滴や栄養のチューブ、気管切開チューブなどを抜くと危険だからという理由で、身体拘束が必要と判断される場面が残っています。

認知症のある患者さんへの無意識の偏見や差別心もまた、身体拘束の安

易な実施につながっています。認知症のある患者さんを「自分たちと同じ一人の人間」ではなく「自分たちとは違う認知症の患者」と捉えてしまうことで、自分の家族にはできないようなことになってしまうのです。まずは、誰しもが持ち得る、この無意識の偏見や差別心を自覚しなければいけません。

私たちは身体拘束ゼロの実現を目指し、「身体拘束を選択肢に入れず、最大限考えて工夫すること」を大切にします。そのための教育に努め、センサーなどのツールを潤沢に用意し、見守りやコール対応に必要なマンパワーも確保。身体拘束ゼロに向けた取り組みを強力にサポートしていきます。

身体拘束に頼らないケア

scene1



目的ある離床で生活リズムを整える

人は本来、拘束される存在ではありません。目的ある離床を軸に生活リズムを整え、拘束の原因になりやすい医療用チューブ類を外せるように、患者さんの力を引き出す支援を丁寧に重ねて、身体拘束ゼロを実現しています。

scene2



人としての尊厳を大切にする

「人として大切にされている」と実感いただけるよう、視線や声かけなどの触れ合い方に気を配り、安心して過ごせるよう心がけています。その安心感が、拘束要因とされる不安、拒否が起きにくくなる「よい循環」を生んでいます。

看護



Z世代とのコミュニケーションを学ぶメンターフォローアップ研修。

栄養



ひき肉と野菜を煮込んだフィリピン料理「ピカディージョ」が給食に！

HAKUAI PHOTO SNAP

リハビリ



接遇の基本と実践ポイントを学ぶセミナーを開催。

デイケア



買い物リハを通じて、持久力と注意力向上を図りました。

はくあい働くひと

回復期リハビリテーション病棟 副師長
身体拘束ゼロ化委員 看護師

竹内 聖子
Takeuchi Shoko

患者さんの変化を
より身近で感じています！



あなたの仕事内容を教えてください

身体拘束に頼らない安全環境を多職種で構築し、患者さんの自分らしさを守る個別ケアの実践を担当しています。

この仕事のやりがいは何ですか

拘束しないことで行動の自由や意欲が戻り、経口摂取など“できること”が増える瞬間に立ち会えることです。

今後の目標を教えてください

多職種で協働しながら身体拘束ゼロを継続し、患者さん中心の視点で個別性と質の高いケアにつなげていきます。



医療法人 平成博愛会

博愛記念病院

HAKUAI MEMORIAL HOSPITAL

徳島県徳島市勝占町惣田9

☎ 088-669-2166

☎ 088-669-3362

✉ info@hakuaihp.jp

Webサイト



博愛記念病院
公式SNS

病院の情報発信中！
ぜひご覧ください！

平成医療福祉グループ
HEISEI MEDICAL WELFARE GROUP

HMW

グループの取り組みについてはこちら